

# 録音笑いの印象に関する研究

About impression of canned laughter

北 折 充 隆

Mitsutaka KITAORI

## 【問題と目的】

2011年7月24日に、日本のテレビは地デジに完全移行した。これまでテレビ局は、アナログと地上デジタルの両方で放送を提供してきたため、放送機材・維持等が大きな負担となってきた。これだけが原因ではなく、インターネットの普及や、様々なエンターテインメントコンテンツの発展などに拠る所も大きい。多くのテレビ局は、テレビ離れ（テレビ東京、2011）などに起因した、大幅な減収に苦しんでいる。これに伴う番組の改編に加え、近年は高額な報酬が発生する人気タレントを降板させるといったリストラや、“ひな壇芸人”と呼ばれる安価な若手タレントを起用した、バラエティ番組を多く放送する方向にシフトしてきている。

ところで、2009年ユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされた“ひな壇芸人”は、またの名をにぎやかしなどと呼ばれ、その目的は派手なリアクションなどでその場を盛り上げることにある（牛窪、2009）。バラエティ番組では、こうして作られた雰囲気を持示することで、視聴者を楽しませるための試行錯誤が繰り返されてきた。例えば、近年テロップを多用する番組が増えているとされるが、

テレビ業界で消極的だったテロップは、小さくしたり消したりすると途端に視聴率が下がったという報告がある（朝日新聞、2005）。批判が多いものの、こうした提供側の手法は一定の効果があるとされる。そして、こうしたテクニックの中で、最も多用されているのが録音笑いである。出演者以外の笑い声がどこからともなく流れてくるこの手法は、実は非常に古典的な“笑い”を誘発するテクニックである。例えば、ラジオの落語公開録音を聞いた時、聴衆の笑い声が笑うタイミングを提示するからこそ、ラジオを聞く側も楽しめる（京須、2005）。ザ・ドリフターズの「8時だよ！全員集合」や、なんばグランド花月の「吉本新喜劇」などは、観客の笑い声が画面を通じ、笑うタイミングの提示や雰囲気を醸成する重要な要素となっている（居作、2001）。録音笑いはいこれを拡張したものといえ、フジテレビ放映「ドリフの大爆笑」などは、市民やスタッフの笑い声を合成処理した中年女性の笑い声や落胆の声、コントの合間に挿入される。日本でラフトラックと呼ばれるこの手法は、アメリカのコメディ番組から導入され（今、2010）、同番組がそのパイオニアとされている。近年はさらにこれが拡張され、

スタジオ内のスタッフ笑いを意図的に流す番組も増加している。これは笑うタイミングの提示の他に、観客を動員しない形の番組でも、出演者に不安を抱かせないという目的もある(太田, 2010)。

以上をまとめ、テロップや録音笑いなどで他者の反応を、画面を通じて提供することは番組のイメージに大きな影響を及ぼすが、これらの手法は社会心理学の領域で、社会的証明として研究が進められている(Cialdini, 1988)。社会的証明は、「行動の適否を、周囲の他者がとる行動に基づき判断する」という理論的枠組みが提示されており(Stiff, 1994; Gilbert, 1995)、寄付行為や交通の流れ、広告宣伝などに広く用いられている(Altheide & John, 1977)。その他にも、子供の犬への接触(Bandura, Grusec, & Menlove, 1967)や援助行動など(Darley & Latané, 1968; Latané & Darley, 1968; Latané & Nida, 1981)、幅広い研究が行われているが、いずれも他者の行動が行動判断に強く影響することを明らかにしている。Cialdiniによれば、録音笑いは一般に、否定的なイメージで評価されており、不快を感じるので辞めるべきだと言ったコメントが、視聴側・制作側の両方で見られる。しかし、実際の心理学的研究では、録音笑いを肯定するような報告も多い。例えばFuller & Sheehy-Skeffington (1974)では、全く同じ番組を被験者に提示し、そのうち一方に録音笑いを提示した場合、提示しなかった場合よりも明らかに笑った回数が多く、その番組をおもしろいと評価していた。Smyth & Fuller (1972)の実験でも、同じ番組のうち一方に録音笑いを提示した場合、提示しなかった場合よりも明らかに笑った頻度が高く、かつ笑っていた時間が長かった上に、その番組を面白いと評価していた。ただ、録音笑いは提供された番組の面白さに対する

評価を高めているといった、単純なメカニズムを生起させているわけではない。例えば、ジョークに対する評価に関する研究(Nosanchuk & Lightstone, 1974)では、録音笑いを提示された方がそのジョークを面白いと評価する傾向があったものの、効果はそのジョークを被験者が本当に面白いと思った時に限られていた。すなわち、視聴者が番組を面白くないと感じた場合、録音笑いが効果を高めた訳ではなかった。しかし、これとは逆に、漫画の印象評定に関するLeventhal & Mace (1970)の研究では、提示された漫画をあまり面白くないと思っている人においてのみ、録音笑いによって提示されたコメディを面白いとする認知を引き上げる効果が見られている。これらの知見を概観する限り、録音笑いが効果をもたらすメカニズムが、体系的に整理されているわけではない。また、録音笑いが番組を面白くさせると行った正の影響をもたらすのか、不快感を生起させて負の影響をもたらすのかについてははっきりしない。さらに、漫画を複数名で見せたYoung & Frye (1966)の実験では、個人で漫画を見た群と比較して、その漫画を多く笑っていたが、漫画自体を面白いと評価していたわけではなかった。こうした知見まで踏まえると、笑うことが面白いという認知を誘発している訳でもなく、録音笑いの認知に及ぼす影響については未だ明らかになっていないのが現状である。しかも、上記の研究はいずれも、個人の特性について言及しているものではない。すなわち、録音笑いにつられて笑いやすい人や、これを楽しみと感じやすい人が実際には存在すると考えられるが、これまで検討の対象とはなっていない。また、録音笑いに対する印象には様々な下位区分があり、これらが絡み合って、実際の印象やイメージに影響することは想像に難くない。

以上をふまえ本研究では、録音笑いの評価や、イメージの相互関係を明らかにすることを第一の目的とする。すなわち、録音笑いのメカニズムを解明する上での手がかりとして、様々な録音笑いのイメージに関する相互関係を明らかにしておく。これにより、どういった影響因子が録音笑いの印象形成に強く影響するのかの手がかりを掴むことができよう。さらに、録音笑いに影響されやすい特性を明らかにするため、いくつかの性格特性と録音笑いとの関連を明らかにすることを第二の目的とする。具体的な性格特性としてまず、性差が録音笑いに及ぼす影響を検討するため、男性性・女性性尺度を元に関連を検討する。一般に、録音笑いで用いられる声は女性のものが用いられることが多いが、スタジオスタッフのそれは、男性のものであることが多い。本研究では男女の比較を行うのではなく、いわゆる“男性的”“女性的”といった一般的な特性イメージについての関連を明らかにする。また、笑いが自分の信念に基づいているかどうかを測定する指標として、自尊心との関連を探る。自尊心が高ければ、「人に流されるのはばかっている」という認知が強いため、録音笑いに否定的な傾向を示すと予測される。さらに、近年多くの研究で用いられている柳井・柏木・桜井（1987）の新性格検査より、録音笑いに影響されやすい特性として、社会的外向性・共感性・自己顕示性・非協調性を投入する。外向的なタイプは他者との良好な関係作りを志向するので、録音笑いなどにも敏感に反応するであろうし、非協調的な人は逆に、我流を貫くという意味で録音笑いに対して否定的であると予想される。共感的な性格傾向であれば、他者の誘導的な笑いに対して順応するであろうし、自己顕示性が高ければ、他者のアピールよりも自身を優先させるため、録音笑いには反応しないと考えら

れる。

本研究では、具体的な録音笑いの場面は提示せず、一般的な録音笑いのイメージと、反応との関係を明らかにする。

### 【方法】

**調査対象** 私立K女子大学の学生129名を対象とした。平均年齢は19.56歳であった。

**調査時期** 平成22年10月に実施した。調査用紙は共通教育科目の授業中に配布し、回答を求め、授業終了後に回収した。

**調査項目** まず録音笑いについて、“最近のバラエティ番組などでよく使われている、スタジオのスタッフや観客などが笑っているように見せかける形で流される笑い声（録音笑い）についてお聞きします。これに対してあなたが抱いている印象について、当てはまる程度について1つ選び、例を参考に○をつけて下さい。”と教示した。その上で、「1. わざとらしいと思う」「2. うっとおしい」「3. しらけるので辞めた方が良い」「4. 臨場感がある」「5. 笑わせるためにはしょうがない」「6. つい、つられて笑ってしまう」「7. 「録音笑い」は効果があると思う」について、まったくそう思わない～非常にそう思うという、5件法で回答を求めた。男性性・女性性尺度は、東（1990；1991）よりそれぞれを一部抜粋する形で9項目ずつに回答を求めた。男性性尺度は「リーダーシップがある方だ」「個人主義的な人間だと思う」「自分は積極的な人間だと思う」などで構成され、女性性尺度は「同情的な人間だと思う」「傷心した人をすすんで慰めるようにしている」「人の気持ちを汲んで理解することができる」などで構成される。自尊心尺度は山本・松井・山成（1982）をもとに、「自分に対して肯定的である」「だいたいにおいて、自分に満足している」「物事を人並みには、うまくやれる」な

ど、10項目を投入した。柳井らの新性格検査については、「陽気なタイプである」「よく人から相談を持ちかけられる」「誰とでも気さくに話せる方だ」などで構成される社会的外向性、「他人の世話をするのが好きだ」「相手の気持ちになって考えるようにしている」「気の毒な人を見ると、すぐに同情する方だ」などで構成される共感性、「コンクールに出すなら必ず入賞したい」「人前で自分の経験を話すのが好きだ」「自分のことが話題にされることが好きだ」などで構成される自己顕示性、「たいいてい人は同情を得るため、自分の不幸を大げさに話す」「世の中の人は人のことなどかまわないと思う」「友人は陰で私の悪口を言っていると思う」などで構成される非協調性など、それぞれ8項目ずつ抜粋された。よって、これら性格尺度は合計60項目となる。

**【結果】**

**項目の信頼性について** 投入した性格特性項目について、本研究では因子分析による因子的妥当性の検証は行わず、既存の尺度構造のままとした。その上で、特性ごとに逆転項

目などの処理をした上で $\alpha$ 係数を算出した。その結果、男性性尺度 ( $\alpha = .85$ )、女性性尺度 ( $\alpha = .78$ )、自尊心尺度 ( $\alpha = .85$ )、社会的外向性尺度 ( $\alpha = .83$ )、共感性尺度 ( $\alpha = .69$ )、自己顕示性尺度 ( $\alpha = .86$ )、非協力性尺度 ( $\alpha = .75$ )となった。これにより、いずれの尺度もおおむね信頼性があるとみなせると判断し、それぞれを下位尺度得点として合成した。これにより、以降の分析についてはこれらの合成得点を用いることとする。

**録音笑いに関する項目間相関** 録音笑いに関する7項目について、項目間の相関係数を算出した (Table 1)。その結果、ほぼすべての項目間で相関が見られた。解釈は考察で行うが、例えば2変数間でもっとも高い相関係数を示した、うっとうしい-しらけるので辞めた方がよい ( $r = .79, p < .01$ )などの、全般に解釈として妥当な方向での相関が見られたのみで、逆説的な相関は見られなかった。

**性格特性との関連について** 投入した7つの性格特性について、それぞれの平均値を元に高群と低群に2分してこれらを独立変数とした。その上で、「6. つい、つられて笑ってしまう」を行動指標とみなし、これを従属変数

table 1 録音笑いに対するイメージ間の相関係数

	わざとらしい と思う	うっとうしい	しらけるので 辞めた方が 良い	臨場感がある	笑わせるため には仕方ない	つい、 つられて 笑ってしまう
うっとうしい	.53 **					
しらけるので 辞めた方が良い	.46 **	.79 **				
臨場感がある	-.02	-.15 †	-.19 *			
笑わせるためには 仕方ない	.06	-.18 *	-.19 *	.41 **		
つい、つられて 笑ってしまう	-.28 **	-.44 **	-.39 **	.34 **	.37 **	
「録音笑い」は 効果があると思う	-.18 *	-.35 **	-.39 **	.34 **	.36 **	.70 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

Table 2 「つい、つられて笑ってしまう」を従属変数とした特性高低別での平均と標準偏差

	低 群	高 群	<i>t</i>
男性性	2.66(.87)	2.79(1.27)	-.67
女性性	2.54(1.07)	2.90(1.10)	-1.86 †
自尊感情	2.52(1.16)	2.93(1.01)	-2.15 *
社会的外向性	2.52(1.02)	2.93(1.13)	-2.15 *
共感性	2.48(.91)	2.94(1.20)	-2.42 *
自己顕示性	2.46(.91)	2.97(1.20)	-2.71 **
非協調性	2.69(1.01)	2.77(1.19)	-.41

※( )内は標準偏差 \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

とした対応のない  $t$  検定を実施した (Table 2)。その結果、自尊感情に有意差が見られ ( $t(129) = -2.15$ ,  $p < .05$ )、自尊感情が高い方が録音笑いをしてしまうことが明らかとなった。また女性性は傾向差が見られ ( $t(129) = -1.86$ ,  $p < .10$ )、女性性が高い方が、録音笑いをする傾向にあった。社会的外向性についても ( $t(129) = -2.15$ ,  $p < .05$ )、外向的な人の方がつられて笑うと回答していた。共感性についても有意差が見られ ( $t(129) = -2.42$ ,  $p < .05$ )、共感性が高い方が録音笑いを良くすると回答していた。また、自己顕示性についても有意差が見られ ( $t(129) = -2.71$ ,  $p < .01$ )、自己顕示傾向が高い方が録音笑いをつられてしてしまうと回答していた。

### 【考察】

本研究では、録音笑いのイメージと性格特性との関連について検討してきた。そこで得られた結果を基に、以下に知見をまとめる形で考察を行う。

まず、録音笑いのイメージに関する相関係数を算出したところ、評価項目は相互に密接に関連していることが示された。録音笑いに対するネガティブな評価は、つられて笑ってしまうという回答とはネガティブな相関を示

しており、わざとらしいとかうっとおしい、しらけるなどと評価するほど、つられて笑うことがなくなる。逆にポジティブな評価として、本研究では“臨場感がある”という項目を投入したが、これが実際につられて笑ってしまったら、効果があるという評価と関連していることは間違いない。このように概観すると、おおむね解釈として妥当な相関が、全般に見られているが、興味深いのが“わざとらしいと思う”と“臨場感がある”の間に相関が見られなかったことである。臨場感があるためには、わざとらしさがあってはならないと一般には考えられ、両者には強い負の相関が想定される。しかし、両者に相関が見られないことから、わざとらしい演出であっても、臨場感を満たす上でそれは障壁とはなり得ないことを示す。例えば多くのクラシック・コンサートなどでは、演奏に対して「素晴らしい!」「ブラボー」などと叫び声を上げたり、拍手をしたりといったサクラを生業とする者が実際に存在する (Sabin, 1964)。聴衆の側も、こうしたサクラの存在を、拍手をするタイミングの指標として認識していることがほとんどであり、かつそれを否定的にとらえるような声は存在しない。換言すれば、録音笑いなどのこうしたサクラの存在が、番組や演奏のリアリティや臨場感を高める上で非常に大きな役割を果たしており、これまで北折 (2007) などが示してきた、周囲の他者がとっている行動などが指し示す行動し表に基づく、社会的証明や記述的規範の強い影響を本研究でも支持されたものといえよう。

性格特性との関連については、どの因子についても高い値を示した方が、録音笑いにつられてしまうと回答していた。まず性別イメージについて、結果を見る限り、録音笑いに影響されやすいのは女性性の方であるといえる。このことは、男性でも女性でも女性的な性格



傾向を持つ人ほど、録音笑いに影響されやすいことを意味する。また、当初の予想と異なり、自尊感情や自己顕示性が高い方が、録音笑いを良くするという結果となったのは興味深い。これらの性格特性が高い人は、一般に人に影響されるよりも、自分が影響を及ぼしたいと志向され、録音笑いなどもしないと回答する傾向が強いと考えがちである。しかし、結果はこれを支持せず、予測とは逆の結果となった。本研究で用いた自尊感情を測定する尺度は、「物事を人並みにはうまくやれる」といった、他者を基準に自身も同程度の能力を持ち合わせているといった知覚に関する項目も含まれている。録音笑いに反応しないことは、自身の笑いなどに対する閾値が他者よりも低いことを意味し、それが自身感情の低下につながるとも考えられる。自己顕示性についても、録音笑いにつられないことが自己に高い価値をもたらすのではなく、「あいつは面白い時に笑わない嫌な奴だ」といった、ネガティブな評価につながるといった解釈も可能である。こうした可能性が、本研究のような結果につながったとも考えられよう。このほか、社会的外向性や共感性については当初の予測通り、高い値を示した方が録音笑いをする傾向にあった。これらはいずれも、他者との良好な関係作りを志向した、他者と自分を合わせることが出来る程度を測定した尺度であり、録音笑いにつられて笑ってしまうのが促進されるのもうなずける結果といえる。

総合して、本研究では録音笑いについて、ネガティブとポジティブの両価的な評価が複雑に絡み合っていることが示された。録音笑いは特に、制作側にあまり良いものと評価されていないことが多いものの、臨場感を形成する上で大きな役割を担っており、極端に否定されるべきものでもない。なお、結果では言及しなかったが、“5. 笑わせるためには

録音笑いは仕方がない”の平均値は2.91 (SD:.99)であり、5件法のほぼ中央値を示している。このことも、録音笑いが過度に歓迎されたり、また否定されたりしているわけではないことの傍証であろう。近年は古典的な録音笑いではなく、制作現場のスタッフの笑い声のような形で自然に挿入するような、違和感のない社会的証明の指標という形で提供されることも多くなっている。これらが初めに述べたとおり、番組を盛り上げる上で大きな役割を果たしていることは、疑いのない事実であり、制作側は今後の番組作りにおいて、その正の側面がより強調されるような手法の開発、および扇動ではない適切な社会的証明の提示が求められよう。

最後に、本研究で明らかにできなかった問題も多い。まず、本研究で扱った男性性・女性性について、調査対象を女性のみとした点である。こうした比較は言うまでもなく、男女のデータを用いて比較することが望ましい。今後は調査対象を男女だけでなく、あらゆる年齢層などにも拡張し、録音笑いが与える好影響と悪影響がどういった範囲に及ぶのかを明らかにする必要があるだろう。さらに、本研究では録音笑いに影響されやすい性格評定をいくつか設定したが、これ以外にも大きく関連する要因があると予測される。これらを追って検討し、総合的な録音笑いが与える影響メカニズムを明らかにすることが、尽きることのない課題であろう。

#### 【引用文献】

- 東清和 (1990). 心理的両性具有 I—BSRIによる心理的両性具有の測定 早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編) 39, 25-36.
- 東清和 (1991). 心理的両性具有 II—BSRI日本語版の検討 早稲田大学教育学部学術研究 (教育・

- 社会教育・教育心理・体育学編) **40**, 61-71.
- Altheide, D. L., & John J. M. (1977). Counting souls: A study of evangelical crusades. *Pacific Sociological Review*, **20**, 323-348.
- 朝日新聞 (2005). おすぎのピリ辛 2005年1月31日夕刊
- Bandura, A., Grusec, J. E., & Menlove, F. (1967). Vicarious extinction of avoidance behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **5**, 16-23.
- Cialdini, R. B. (1988). *Influence: Science and practice*. Scott, Foresman and Company. (社会行動研究会(訳) (1991). 影響力の武器 -なぜ人は動かされるのか- 誠信書房)
- Darley, J. M., & Latané, B. (1968). Bystander intervention in emergencies: Diffusion of responsibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 377-383.
- Fuller, R. G. C., & Sheehy-Skeffington, A. (1974). Effects of group laughter on responses to humorous material, a replication and extension. *Psychological Reports*, **35**, 531-534.
- Gilbert, D. T. (1995). Attribution and interpersonal perception. In A. Tesser (Ed.), *Advanced social psychology*. New York: McGraw-Hill. Pp.99-147.
- 今祥枝 (2010). 海外ドラマ10年史 日経BP
- 居作昌果 (2001). 8時だヨ!全員集合伝説 双葉文庫
- 北折充隆 (2007). 社会規範からの逸脱行動に関する心理学的研究 風間書房
- 京須借充 (2005). 落語名人会夢の勢揃い 文春新書
- Latané, B., & Darley, J. M. (1968). Group inhibition of bystander intervention in emergencies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 215-221.
- Latané, B., & Nida, S. (1981). Ten years of research on group size and helping. *Psychological Bulletin*, **89**, 308-324.
- Leventhal, H., & Mace, W. (1970). The effect of laughter on evaluation of a slapstick movie. *Journal of Personality*, **38**, 16-30.
- Nosanchuk, T. A., & Lightstone, J. 1974 Canned laughter and public and private conformity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 153-156.
- 太田サトル (2010). 出演者のため? 視聴者のため? バラエティー番組の「スタッフ笑い」の謎に迫る! 日刊サイゾー 2010年7月14日 <[http://www.cyzo.com/2010/07/post\\_4979.html](http://www.cyzo.com/2010/07/post_4979.html)> (2011年2月10日)
- Sabin, R. (1964). *The international cyclopedia of music and musicians*. New York: Dodd, Mead & Co
- Smyth, M. M., & Fuller, R. G. C. (1972). Effects of group laughter on responses to humorous material. *Psychological Reports*, **30**, 132-134.
- Stiff, J. B. (1994). *Persuasive communication*. New York: Guilford.
- テレビ東京 (2011). テレビ東京営業局城山センター/メディアガイド:メディアデータHUTの推移グラフ テレビ東京 2011年2月9日 <<http://www.tv-okyo.co.jp/contents/ir/pn/jmedia/mediadata.html>> (2011年2月9日)
- 牛窪恵 (2009). 独身女性200人に聞く モテるおカネのつかい方 アスペクト
- 山本真理子・松井豊・山成由希子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 **30**, 64-68.
- 柳井晴夫・柏木繁男・国情理枝子 (1987). プロマックス回転法による新性格検査の作成について(I) 心理学研究 **58**, 158-165.
- Young, R. O., & Frye, M. (1966). Some are laughing: Some are not-why? *Psychological Reports*, **18**, 747-754.

※本論文は、平成22年度卒業生である伴宏美による卒業論文のデータの一部を用い、筆者が再分析・まとめ直したものである。記して感謝する。